
青い涙と狂人達の愛

猫乃しらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い涙と狂人達の愛

【Nコード】

N60010

【作者名】

猫乃しらす

【あらすじ】

舞台は孤島の古い洋館。

財閥・笹川家はこの洋館で一週間パーティを開催する。そこに招かれたのは、沢田綱吉、山本武、雲雀恭弥、そしてツナの執事・獄寺隼人だった。

しかし、このパーティは笹川家令嬢・京子の婿を決める婚約ゲームだったのだ。

この事実を知っている者、知らない者、そして京子のメイド・三浦ハルや笹川家の使用人・六道骸、クローム髑髏、京子の兄・笹川了平。

それぞれの思いや策略、愛憎を巻き込んで、ゲームは更に激化していく。

そんな中、京子の父は謎の失踪を遂げるのだった。

外部との接触が断たれた孤島で、彼等を待っているのはハッピーエンドか、それとも・・・。

追記

この作品は魅崎杏樹さんとの合作2次小説です。

11月14日

「青い涙と狂人達の愛」がボイスドラマになりました！
こちらから

<http://2nd.geocities.jp/hirureborn/index.html>

ボイスドラマはもうひとりの原作者魅崎杏樹さんが企画、制作して下さいました！！素敵な企画ありがとうございました。

制作過程中に部分部分を聞かせて頂きましたが、キャスティングの方々が素晴らしく熱演されています！ボイスドラマの方もよろしく

お願いいたします。

プロローグ 笹川家執事 六道 骸（前書き）

魅咲杏樹様との合作二次小説です。

注意事項

こちらは家庭教師ヒットマンREBORN!の二次創作パロディー小説です。

REBORN!キャラが登場するミステリー小説ですが、原作のキャラクターのイメージが崩れる恐れがあります。

原作とは別世界と受け止めていただけると幸いです。
また本作品にはグロテスクな表現がございますので、年齢制限はR-15となっております。ご注意ください。

以下の要素もあります！

昼ドラのパロディー（どろどろ愛憎劇と惨劇）

ハル総受け（NL要素のみで）& amp; ツナ京あり

京子ちゃんが腹黒い

獄寺・ツナ・了平・京子がヤンデレ

他の登場人物もキャラ崩壊（L5的な意味で）

骸が黒執z（ry

オリジナルキャラクター（京子ちゃんの父）が登場する

原作設定完全無視（年齢設定バラバラ）リボン不在

登場人物が悲惨な目に遭う（軽いR-15程度）

山本が病弱

プロローグ 笹川家執事 六道 骸

今宵、悪趣味にも美しい、遊戯が始まるだろう。

「ようこそいらつしゃいました。ボンゴレファミリー次期当主、ツナ様」

「ははっ。久しぶりだね、骸」

執事を一人つけた目の前の少年は笑顔でこちらを向く。今宵起こることなどまるで予想すらしていない無垢な瞳。

「それにしても…笹川おじさん。父じゃなく僕個人に招待状を送るなんて…」

「今宵のパーティーは若い方には是非来てほしいと」

「なんでわざわざ孤島の別荘でするんだい？」

「恭弥くん！！ 久しぶり」

向こうから黒髪をなびかせ、こちらに近づいてくる少年 歌舞伎会の黒幕と言われる雲雀家の次男、雲雀恭弥。彼もまた今宵のゲームに必要な駒。

「これはこれは恭弥様、ようこそいらつしゃいました」

「全く…こんな孤島だから、車もないしね。港から歩く羽目になったよ」

小言をいいながら溜め息をつく。彼もまた今宵のことを知らない。

「おーい！！ツナ！恭弥！骸！…と、獄寺もいたのな」

満面の笑みでこちらに歩いてくる男は、着物に身を包んでいた。彼こそ、3人目の“駒” 時雨蒼鉛流家元、山本武。

「これはこれは武様。これで本日のゲストはお揃いですね…。どうぞ中へ」

昨晚のこと

僕はあの男に呼び出された。

部屋に入ると、その男は椅子に座り、僕と娘の京子様に話したいことがあると言った。

まもなく京子様が部屋にやってくると、その男は一呼吸置いた後にこう言ったのだ。

明日、盛大なるパーティーを行う。

このパーティーはゲームの幕開けに相応しい。

ゲーム？そう、ゲームだよ。我が笹川財閥の未来をかけたゲームだ！そしてそのゲームのプレイヤーは、京子、お前だ。

誰が京子の婿となるのか…

我が娘、京子は一体誰を婿に選ぶのか…

その為にこの孤島という舞台に沢山の種を蒔いた。

京子！お前に一週間という月日をやる。その期間に、私が選びし男達の誰かがお前に求婚し、お前がそれに応じ結婚するというなら…

この笹川家の全てを！お前にやろう！

フハハハハハハ！！！！

京子様はその男に辟易しながらも、口角をあげ、スカートの裾を持って「分かりました。お父様」と言い残し、部屋を出て行った。その後ろ姿は何かを固く決意したような野心をまとうているようだった。

おそらくは

「骸よ、儂を狂っていると思うかね？」

「いいえ、僕は家具でしかありませんから…御主人様が常人であるうが狂人であるうが職務を全うするだけです」

「そうか…なら、お前にこのゲームの全て見届けるといふ職務を与える」

「かしこまりました、マイロード」 w
が…しかし

「京子様があの方に好意をよせているのは、笹川様もご存知なので
は？」

「だから面白いのではないかね。このゲームでは男からの求婚を
京子が受け入れなければいけないというルールであるのだ」

「必ずしも…男からでなければならぬ、という訳ですね」
全く、この男は腐っている。

「ああ。それに男の駒の中には、明日のパーティーが結婚ゲームで
あることを知っている奴もいる」

「しかし、その駒は京子様の思い人ではないと」

金持ちの、暇つぶしの遊戯など、ロクなものはない。

「ハハハハハハハ！流石は骸！その通りだ。お前もこのゲーム
を存分に楽しむがいい！！」

「かしこまりました、マイロード。では僕はこれで下がります」

あの男は狂っている。

実の娘を、ゲームのための駒にさえするのだから。

そして、僕もあの男の駒なのだろう。“傍観者”という名の駒

しかし、僕はゲームの当事者ではない。当事者になる資格も義務も
ない。だからこそあの男の言うようにこのゲームを僕なりに楽しむ

うではないか。 “ 傍観者 ” として。

クフフフフ…

そして今、その幕が上がろうとしている。

「どうぞ、皆様。こちらの部屋へ」

僕は “ 駒 ” 達を幕開けの舞台へと運んだ。

九月一日 笹川家長女 笹川京子

“今夜は激しい雷雨が予想されます”

朝の天気予報通り、窓の外は雲行きが怪しくなってきた。お兄ちゃんは今夕方帰ってくるみたいだから、もうすぐの筈だけど…傘、持ってるのかな？

「お父様に選ばれた人…か…」

さつきキッチンで見かけたけれど、晩御飯のデザートには、私の大好きなベイクドチーズケーキが出るみたい。こう言う日は、私にとって良くないことが起こる。ケーキは私のご機嫌取りの道具。こんなに晩御飯が憂鬱になるのなら、見るんじゃなかったな。

「あ、京子ちゃん」

「ツツくん？」

廊下ですれ違ったのは、沢田綱吉くんだった。

彼とは幼い頃からの馴染みで、家族ぐるみで仲良くしてもらっている。昔から頑張り屋さんで面白い人だった。

久しぶりに会った彼は、背が伸びていて、振り向き際に見せた大きな背中が、彼が少年から大人の男性になった事を物語っていた。

「じゃあ、また後で」

彼は、昔と変わらぬ無垢な笑顔で手を振った。さつきまでの憂鬱が嘘みたいに晴れやかな気持ちになる。

私は、全てを包み込んでくれる彼の笑顔が大好きだった。

「笹川邸へようこそ、沢田殿、雲雀殿、山本殿。短い間ではあるが、

今宵から我らは生活を共にする仲間。家族が増え私も嬉しい限りじや。フハハハハ」

お父様の冗談混じりの挨拶で、宴は幕を上げた。

いつもは私とお父様、そしてお兄ちゃんだけの食卓も、今日は賑やか。お兄ちゃんの仕事が長引いてるみたいで、まだ帰ってないけど…

食卓には知らない人も座っていた。私の右側にはツツくんとその執事の獄寺さん、左側には山本武さんに雲雀恭弥さん。

「初めまして。笹川家長女・笹川京子と申します」

私の挨拶が終わると、今度はお父様がそれぞれの紹介してくれた。山本さんはしっかりしていてユーモアもある人。雲雀さんは無愛想でなんだか怖い人って感じがする。

だけど皆、正装で改まって…まるでお見合いしてるみたい。

何を話す訳でもなく、しばらく沈黙が続いた。ツツくんは兎も角、この人達と一週間一緒に過ごすなんて…なんて無意味な戯れ事なのかしら？

その時、テーブルにベイクドチーズケーキが運ばれた。

ベイクドチーズケーキを運んできたのは、メイドのハルだった。だけどハルは私専用のメイドのはずだ。普段パーティーの食事を運ぶのは笹川家としてのメイド、クロームさんなのに…。

「本日のデザート、ベイクドチーズケーキでございます!!」

ハルは大きな声で、デザートを説明した。

私はハルの元気のいいところが気に入っている。

だけど…今は静粛な場。もう少し空気をよんでほしかったな。

「うわぁ！いい香り！」

ツツくんは大袈裟に香りを嗅ぐ素振りをした。

ツツくんはいつもそう。何だって大袈裟なくらい嬉しそうなりアクションをするんだ。

「すっげえ上手そうなのな！」

山本さんは満面の笑みでそう言う。あ……この笑顔が彼の“本物”の笑顔なんだろうな、と今日出会ったばかりの彼に対して思った。

さつきまで、作り笑顔ですら浮かべなかった雲雀さんまでも口元に笑みを見せた。

何だろう…。さっきまでの緊張した空気がほどけている。

一瞬、何が起こったのか分からなかったけど、直ぐにハルがティーポットを床に落として、紅茶をばらまかせてしまったのだと分かった。思いの外ティーポットが熱くて落としてしまったのだろう。さっきの音はティーポットが砕けた音。

どうやら混乱状態のハルは、ティーポットの破片を片付けようとして手を切ったみたいだ。

「大丈夫！？ハル！！　素手で触ったりしたらダメだよ！危ない！」
そう言ってツツくんはハルの手を優しく自分の手で包んだ。

「もうよい！ハルは下がれ！！
骸、クローム、これを片付けろ」
お父様は声高に叫んだ。

骸さんとクロームさんは手際よく破片を取り除き、こぼれた紅茶を拭いた。その横でハルはまだ突っ立っている。

そしてツツくんはそんなハルを悲しげに見つめていた。

…いい加減にして。

お父様は下がれと言ったはず。どうしてまだそこに突っ立っているの。いい加減にして。いい加減にツツくんの前から消えなさい。

「ハル、お父様は下がりなさいと言ったはずよ」

湧き出る感情を抑えながら、なるべく優しい口調を意識しながら言う。

「はい…」

ハルはうなだれながら、部屋を後にした。ツツくん、だけじゃない、山本さんや雲雀さん、ツツくんの執事の獄寺さんまでハルの後ろ姿を悲しげに見つめていた。

何…？何なのだろう。

なぜか私の中で正体不明の不快感が募っていく。

「いやあ…我が使用人が粗相をし、雰囲気壊してしまい申し訳ない。直ぐに執事に新しいお茶を用意させます。気を取り直してパーティーを続けましょう」

お父様は意気揚々と言いつた。しかし、今夜の晩餐でみんなが“本物”の笑顔を見せることはなかった。

九月二日〜三日 笹川家長女 笹川京子

昨日の大雨が嘘のように、カーテンから漏れる光が眩しかった。こんな清々しい朝なのに、私の心は昨日と同じ。今日はいつも以上に目覚めが悪い。

「京子ちゃん、グッモーニンです〜!」

扉越しにいつもの大きな声が聞こえた。

ハルは人に分け隔てなく接することができる。それは私に対しても同じこと。小さい頃からの仲だけど、主を“ちゃん呼ばわり”は馴れ馴れしいにも程があるんじゃないの？

「あ、おはよう。ハル」

私たちはいつも一緒だった。まるで姉妹の様に、いつだって離れることはなかった。

「今日はお洋服が良いですかね?…あ、これなんか可愛くないですか?」

でもね、私たちはもう親友ごっこをする様な歳じゃないんだよ?

「やつぱり!お似合いですよ!」

ぱちぱちぱち、と子供をあやす様に両手を鳴らすハル。身支度も出来たから、私たちは大広間へ向かうべく部屋を出た。

「…雲雀さん?」

私の部屋の前で何してるの?通りすがりじゃないことは確かだよ。

「笹川京子」

私の名前を呼んでいるのに、切れ長の彼の目は確かにハルを捕えていた。

「君が好きだよ」

この人、何を言ってるんだろう？冷めた目で彼を見上げる私の後ろで、ハルが歓喜の声を上げた。

「はひー！凄いです、生プロポーズです！」

良かったですね、京子ちゃん！とハルは私の肩をポンと叩き、ごめつくりと言わんばかりに一人廊下を駆けていった。

「何のつもりですか？」

「彼女が言った通り、プロポーズだよ」

やっぱり彼の目は私を見ていない。

「君、沢田綱吉が好きなんでしょ？」

「どうして……」

「返事はいつでも良いよ。君にその時が来たら……ね」

雲雀さんは耳元で囁いた。そして口角を少し上げたかと思うと、何事も無かったかのようにその場を立ち去った。

「京子ー！」

廊下の曲がり角の更に向こうから、いつもの様に私を呼ぶ声が聞こえた。

「……お兄ちゃん……」

勢いよく駆けつけた私の兄・笹川了平は、少し息を切らせながら両手を合わせた。

「昨日は帰れんで済まなかったな！」

「うっん、大丈夫だよ」

「ん？アイツは…雲雀ではないか」

「お兄ちゃんのお知り合い？」

「あ、ああ。雲雀とは取引先で知り合つてな…」

小さくなつた雲雀さんの背中を、お兄ちゃんは渋い顔をして見ていた。

「奴は極限にひねくれ者だからな。何を考えているのか分からん時がある…」

何かあつたら、お兄ちゃんに相談するんだぞ。そう言うと、いつもの様に頭を撫でてくれた。

「ありがとう…」

優しいお兄ちゃん、大好きなお兄ちゃん…彼だけは私の全てを受け入れてくれる。

身体の底から熱いものが込み上げてくるのを感じた。

「お…お兄ちゃん、あのね…」

「ん？どうした京子？」

昨夜私の目の前に現れた男の人達は、幼なじみのツツくんを含めて私の婚約者候補なんだつて。私がその三人の誰かからプロポーズを受け、それに応じたなら、笹川家の財産は全部私のものなんだつて。さつきその雲雀さんからプロポーズを受けたの。だけど私は昔からツツくんが好きなんだよ。私はどうしたらいいのか分からない、何だか私には重くて潰れてしまいそう…

沢山言いたいことがあつた。お兄ちゃんに聞いてほしいことがあつた。だけどこんな突拍子なことを沢山言つたら、優しくて真面目なお兄ちゃんを困らせてしまうかもしれない。それに…
なぜかハルの顔が浮かんだ。

「うつん、ごめん。何でもないの。さあ、お兄ちゃん、朝食食べに

行こう！」

明るい笑顔を作って、お兄ちゃんの背中を押した。

「お……おお……！」

お兄ちゃんは何か言いたそうだったけど、私の勢いに押されたのか、何も追求してこなかった。

お兄ちゃんの背中を押すような体勢のまま、広間への廊下を進む。

どくん

心臓が一瞬浮かんだ。

ハルだ。

廊下でハルが獄寺さんと喋っている。

私とハルが小さいときからの付き合いのように、獄寺さんも小さいときからツツくんの執事だった。私とツツくんは昔から仲が良かったから、お互いの家を行き来したりして、私、ハル、ツツくん、獄寺さんの4人でよく遊んだりもした。ハルとは違い、使用人としての自覚がある獄寺さんは、流石に私に気安く話しかけることはなかった。けど同じ使用人であり、誰にでも分け隔てなく接するハルに対しては、打ち解けているようで、よく話しかけているし、ハルに「アホ！」と冗談混じりに罵っているのも聞いたことがある。

だから2人が喋っている光景は珍しいものではない。

会話の内容は聞こえないが、今もハルが余計なことを言ったのである。獄寺さんの「アホ！」という部分だけは声高だったので聞き取れた。

使用人である2人の会話なんて、正直私にはどうでもいい。

ただ、私はひとつ思っている。

獄寺さんは、ハルのことが好きなのではないか、と。

獄寺さんがあんな風に感情を露わにして表情豊かに話をするのは昔からハルにだけだった。ハルの些細な言葉に一喜一憂し、感情的になる。主人であり、尊敬しているツツくんに対してもあそこまで感情的になったりしない。

…いいじゃない。

昔からお似合いだと思っている。

同じ使用人なんだし……ね、ハル？

その途端、向かい側から骸さんが慌てて走ってくる。

骸さんが慌てるなんて珍しい。

「了平様！京子様！大変です！！」

「どうした！？ 骸！」

「この島の港から船が全て消えました。電話の外線も通じません…」

「な…なにい！！！？」

「じゃ、じゃあ今の私達は外部から切り離されたってこと…？」

「はい…。そして…実は」

骸さんの表情が曇る。嫌な予感がした。そしてその予感の的中する。

「ご主人様のお姿が昨晚から見当たらないのです」

お兄ちゃんの指示で、私たちは大広間に集められた。遅れて山本さんやツツくん、クロームさんも駆けつけた。

「島から出られなくなっただって…そりや本当かよ！？」

「昨日の嵐が原因じゃないんですか…！？」

どうやら皆騒ぎの事を知っているようだ。山本さんだけでなく、いつも穏やかなツツくんまでもが声を荒立てた。

「骸。詳しいことを聞かせてくれ」

周りを見渡し、全員集まった事を確認すると、お兄ちゃんは骸さんに訊ねた。

「はい…昨日の午後8時半頃、僕とクロームは御主人様の書斎に呼ばれました」

8時半というと、夕食が終わった頃。私たちもすぐに部屋に戻った

から、お父様に会ってない。

「しかし…いざ書斎へ向かうと、御主人様の姿は無かった…書斎にはこれだけが残されていました」

「これは…！」

「笹川家に代々伝わる指輪です」

その指輪には笹川家の家紋がはつきり刻まれていた。お父様が笹川家の家督を放棄した…？どうしてこんな事を？

「私も手分けしてお屋敷中を探したのですが、結局見つからず…」

「本島とこの島が完全に遮断されてしまったのです」

いつも感情を表に出さないクロームさんまで目を潤ましていた。何なのこの茶番は？二時間ドラマじゃあるまいし、これから何が起これと言うの？分からない…分からないよお父様。

「今は親父を探すのが先決だな。屋敷の外はまだなのだろう？悪いがお前たちも協力してくれ」

私たち9人は、手分けしてお父様を探した。探したところでお父様は見つからない、そう薄々感付いていたけれどそうせずには居られなかったから。

海岸沿いを歩いていると、階段に座っている山本さんを見つけた。

山本さんはしばらくぼうっと地平線を眺めていたけれど、私に気が付くと少し困ったように笑ってみせた。

「悪いな…こんな時に役に立てなくて…」

山本さんは時雨蒼燕流後継者。実家はお寿司屋さんって聞いた。その表情は、自分が良家の出身でない事を畏縮している様にも見えた。「このタイミングで持病が祟るとはな…」

持病…？そう言えば昨日から、咳き込む山本さんの姿を何度か見かけた。今もすごく苦しそう…肺炎か何かなのかな…？

「あの、無理しないで…くださいね」

「サンキューな」

山本さんは優しく微笑むと、立ち上がり屋敷へ向かった。
でもそれは、昨日見た“本物”の笑顔とはやっぱり違うもので…遠ざかる背中、二度とこちらを振り向かない気がして…瞳を閉じればやっぱりハルの顔が浮かんだ。胸が締め付けられる様に痛い。なんだろっ、この気持ち。

午後14時

島を一通り探し回った私達は、居間に集まっていた。

「親父はどこを探し回っても居なかったというわけか」

落胆する私達。お父様は一体…どこへ？

無事ならいいのだけど。

ゴホッゴホッ

居間の端で山本さんは、うずくまって咳いている。本当に苦しそう

…

「大丈夫ですか？ お…お水です…！」

ハルが水を差し出して、山本さんの背中をさする。

「さ…さんきゅうなっ…」

コホン

話の筋を戻す合図のように、雲雀さんは咳払いをひとつした。

「笹川社長が失踪し、港の船が全て消えた…。これは明らかに笹川社長が意図的に僕達をこの孤島に閉じ込めたんじゃないの？」

「なっ…！！ 貴様、何を根拠に！！ 親父を疑うなど極限に冒涇だ！」

「落ち着いて！お兄ちゃん！」

お兄ちゃんの服の裾を両手で引っ張る。

「お兄ちゃんの言う通りよ。それにお父様がそんなことする理由がないわ！」

フッ…。

雲雀さんは不気味な笑みを、その薄い唇に作った。

何が可笑しいの。

「君なら薄々分かつてるんじゃないの？ 笹川社長の失踪の理由」

「え…？」

お父様の言葉が浮かんだ。このパーティーは、笹川家の未来をかけたゲームなのだと。

雲雀さんはこの茶番がゲームだということを知っている…？

「と…とにかく！ 笹川社長の失踪が事故で、外部との接触が遮断されたとなると、僕達も一所にいるべきじゃないかな…！」
そう言いながら、私と雲雀さんの間に入ってきたのはツツくんだった。

「そうつすよ！ もし笹川社長が何者かに拉致されたなら俺達も危ないっす！」

「え…お父様が拉致…？」

ふつと意識が、揺らいだ。

と、同時に足の力が抜ける。

「きよ…京子ちゃん…！」

後ろから私を支えてくれたのはハルだった。

「まだ、失踪は故意なのか拉致されたのかは分からない…。だけどその可能性はあると思うんだ。だけど…京子ちゃんのお父さんは絶対僕が見つけるから…！」

そう言つてツツくんは私の手を優しく握った。

その手は温かくて、ツツくんの顔はいつもより凜々しくて、自然とツツくんの言葉を信じられた。

涙が込み上げる。

ツツくん…大好きだよ。

「では！ ハルは昼食の用意をしますです…！ お腹が空いて

は戦は出来ぬ、です！」

ハルはみんなに呼びかけるように言い放った。

「だな！ 腹減ってたらイライラするのな」

「ああ！頼む、アホ女！」

その時、地響きのような音が響いた。

ハルは顔を真つ赤にしてお腹に手を当てている。

「君が一番、食事を欲してるみたいだね」

雲雀さんはにやりと笑う。その言葉につられるように、山本さんと獄寺さんも声を上げて笑った。

まただ…。

ハルは緊迫した空気を解かして、別の空気に変えてしまう。

「ははっ。ハルは変わらないなあ」

ツツくんも、その無垢な笑顔をハルに向けた。

私はその横顔を、今まで感じたことのない気持ちを抑えながら、見つめることしか出来なかった。

【九月三日】

昨日の夕食は、ほとんど喉を通らなかった。

何でかな？私どうしちゃったんだろう…

ねえ

ツツくん…

私ね、ハルが邪魔で仕方がないんだ。

ツツくんは、私の事を見してくれる…

でもね、ツツくんには私だけを見ていて欲しかったんだよ。

なんでハルにそんな顔するの…？

皆だってそう。笹川家の後を継ぐ気なんてさらさら無いじゃない。

あの子のどこがいいの？あの子はただの使用人。あの子はただの役

立たず。あの子は、あの子は　　！

「……！」

何考えてるんだろう、私。夢の中の私は、あまりに感情をさらけ出して、自分じゃない様で怖かった。

頭が…痛い。

外の空気でも吸って、気持ち落ち着かせよう。

ガチャ

「ツナさん…！」

丁度、私が部屋のドアを開けたその時だった。その声は廊下中に響き渡った。

誰が叫んだなんて、すぐに分かった…ツツくんの事を“さん付け”で呼ぶのは一人しかいないのだから。

中庭には朝陽が射し込んでいた。そこを挟んだ窓越しに見えたのは、ツツくんの後ろ姿だった。その背中には女の子の手が回されていた。小さくて私と同じくらい白い…そうハルのものだ。

分かったよ、ツツくん。

私がハルから解放してあげる。

お父様の書斎に行けば、なんでも手に入るから。
今から探しに行くよ。

だから、待っててね？

九月三日 京子婚約者候補 雲雀恭弥

慣れない部屋では早くに目が覚める。

白い天井、白い窓、白いベッド…不自然な程の白は僕の落ち着きをなくさせる。

白 を見てまず浮かぶのは、笹川京子のメイド。

三浦ハル。

彼女を思うと、自然にふっと笑みがこぼれた。この僕がここまで他人に興味を持つとはね…。

自分でも信じられなかった。

彼女をもっと知りたい、そして手に入れたい。

だけど、彼女を手に入れるのは笹川京子を手に入れてからだ。

いや、笹川京子と言うより笹川家の財産と言うべきだろうか。我が雲雀家は、由緒ある名家だが、近年になって業績が伸び悩み、低迷している。面倒だけど、莫大な資産とコネクションを持つ笹川家の力は必須だ。

笹川家の財産を手に入れ、そして三浦ハルも手に入れる。それほど時間はかからないだろう。

ツナさん！！

この高く明るい声は…聞き違いもない、三浦ハルだ。

声がした方を確かめるため、窓をあけた。そこにいたのは三浦ハルと…沢田綱吉。

三浦ハルは沢田の背中に手を回している。沢田が何か囁いているようだ、ここからでは聞こえない。

あの2人は親密な関係のようだ。三浦ハルを手に入れるには沢田という障害があるらしい。

いや…。

これは逆に事を早く運ぶチャンスなのかもしれない。

僕は側にあつた携帯電話を取った。

僕は笹川社長の書斎の前で待ち伏せていた。来るかは分からないけど、僕の読みは当たった。

「やあ」

「雲雀さん…。どうして貴方がここに…」

「京子、さんに会えるような気がして」

京子さんと呼んだのが意外だったのか、会えるような気がしたと言ったのが不気味だったのか、笹川京子はあからさまに不信感を表す顔をした。

「京子さん。どうやら貴方の思い人は彼女と恋仲のようだね」

笹川京子の耳元でそう囁きながら、ポケットから携帯を取り出て開き、彼女に手渡した。

「こ…これは!」

携帯画面に写っているのは沢田と三浦ハルが抱きしめ合っている写真。
真。

京子は思いの外、驚いた表情はしなかった。

もしかして君も知ってたのかな？

携帯を握る手が震えだしている。

「ひ…雲雀さん。この写真、私の携帯にも送ってくれるかしら？」

この女、なぜ自分の思い人が他の女と抱き合ってる写真なんて欲しいのか。

「別に構わないけど」

しかし切っ掛けが何であれ、笹川京子の携帯電話の連絡先を手に入れたのは幸運だった。これから何かと行動しやすくなる。

「雲雀さん…。この事は…ツツくんとはハルの事、今私たちが話した事も黙っておいて欲しいの…」

京子の体は震えていた。泣いている…? いや…

「それも構わないけど」

「ありがとう」

そう言つて京子は去つていった。

そう、その時彼女は確かに笑つていたのだ。

笹川京子が浮かべていたあの笑みが、頭から離れなかった。

沢田綱吉の事は京子に任せておけば大丈夫だろう。彼女も彼女なりに考えがあるようだ。僕が直接手を下すまでもないね。

さて、次はどの駒を動かそうか？

朝食を摂りに広間に向っている途中、笹川社長のメイドであるクローム髑髏とすれ違った。彼女もまた社長の書斎に用があつた様で、僕がその方向から歩いてきたに驚いていた。

「あの…雲雀様」

「ん、何？」

「どうしよう…私、とんでもない事を」

彼女は涙を溜めて、立ち尽くしていた。主人を“な”くした家具は、屋敷においてただの装飾品になつてしまふんだ。君のようにね。でも意外だったのは、君が社長令嬢の京子よりも人間的感情を持っていたと言ふことだ。その点は誉めてあげるよ。

そこに、同じく執事の六道骸が現れた。骸は彼女を呼びに来たらしく、僕に一礼するとスタスタと去つていった。

にしてもこの屋敷、広すぎじゃないかい？いつになれば朝食にたどり着けるのだろうか。

更に歩いていくと、階段の踊り場から男の声が聞こえた。覗いてみると、そこには山本武、そして沢田綱吉の執事・獄寺隼人の姿があった。

「黙れ！…てめえに何が分かるってんだ！」

到底、執事とは思えない口調で、獄寺隼人は目の前の男の胸ぐらを掴んだ。

「獄寺、何ムキになつてんだよ…？」

ワオ。今日は皆、朝から気性が荒いね。カルシウムが足りてないんじゃない？

「あ、恭弥！」

山本武がこちらに近づいてきた。なんで君はそう群れたがるんだい？目障りなんだけど。

「聞いてくれよ、獄寺が」

「てめえには関係ねえ！」

あつそう。別にどうでもいいよ。僕は聞く気なんてさらさら無かったからね。

でもこれで確信したよ。笹川社長が居なくなつて、館内の人間がどうにかなつたという事をね。僕は彼らと目を合わせることなく広間へ向かった。

朝食中の雰囲気は、異様な程に静かで落ち着いたものだった。

先程抱き合っていた沢田と三浦ハル、それを目撃した京子。泣きながら動揺していたクローム髑髏、言い争いをしていた山本武と執事の獄寺隼人。

その当人達は何事もなかったかのように振る舞っている。しかしそれらは全て平然を装っているに過ぎない。

ただ一人だけ、平然でいられない奴がいた。

笹川了平だ。

笹川家の長男としての責任を感じているのか、周りが思いの外落ち着いているのが気に入らないのか、苛立ったようにスプーンの音をたてたりしている。

笹川了平のそういう部分は嫌いではないが、周りが平然を装う中一人だけ自分にバカ正直というのも、少し哀れだ。

朝食も食べ終わり席を立とうとした時だ。

「あ！恭弥くん、待って！ みんな一緒の所にいる方が安全だよ！」声をかけてきたのは沢田だった。

「いや、少し一人になりたいんだよ」

四六時中、このメンバーと同じ空間にいななければならないと思うと鳥肌がたった。

「そうだが、ツナ！ いくらみんなにいる方が安全だつってもよ、別に明確に被害が出るってわけでもないしな。俺も部屋に戻るわ」そう言つて山本武は広間を後にした。山本の意見はもつともだが、山本らしからぬ行為であつた。

「た…武」

「んじゃ、十代目。俺も失礼します」

「ご…獄寺くんまで…！」

獄寺が沢田の意見に背くのも、また意外だった。

「…いいじゃない、ツツくん」

静かに口を開いたのは京子だった。

「別に誰かが危険な目にあつた訳じゃないし。プライベートの問題もあるし、ずっと一緒に過ごさ過ぎ過ぎさないは自由じゃない？」

「あ…そ、そうだけど」

「じゃあ私も部屋に戻るわ」

そう言い残し、京子も広間を後にした。僕もそれに乗じるように自室に戻った。

少し気になっていたのは山本と獄寺の言い争いだ。獄寺の言うように僕は関係のないことだし、言い争っていた内容にも興味はない。

しかし、沢田の執事である獄寺と、山本はこれと言って接点のない関係だ。なぜあの二人が言い争っていたのか。

トントン

「恭弥、いるか？」

ドアのノック音と共に、山本の声がした。この階には、僕、山本、沢田、獄寺に与えられた部屋が一つずつある。山本の部屋は僕の向かい側だ。

「いるけど…どうかしたのかい？」

ドアを開くと、山本が真剣な面持ちで立っていた。僕は部屋のドアを閉じ、廊下に出た。

「実はよ…笹川のおじさんが行方不明だっけ言うときに不謹慎かもしれねえが…誰かに話さねえと気が収まらなくて」

一応、山本と沢田とは幼少期からの付き合いだ。僕は今までこの二人と親しいだなんて思ったことはなかったけど、山本にとったら僕は“気の許せる幼なじみ”なのかもしれない。

「実は俺…、一目見たときからあの娘が…三浦ハルちゃんが好きなのかもしんねえわ」

鼓動のリズムが乱れた。まさか…彼もまた三浦ハルに好意を寄せていたなんて思いもしなかった。

「ほら、俺って昔から持病持ちじゃん？ だからあんな風に元気で空気を暖かく変えてくれるあの娘が…なんつうかな、太陽みたいに思えて」

「確かに彼女は明るいよね…」

「で、今朝、俺見ちまったのな。ハルちゃんがツナと抱き合ってるよ。すげー驚いてさ、正直ショックだったよ。で、ツナとハルちゃんがそういう関係なのか確かめようと、朝、獄寺に今朝見たことを伝えたんだよ」

「ああ…さっきの言い争い、ね」

「ああ。で、俺思ったのな。獄寺のあの反応は…アイツもハルちゃ

んのこと好きなんじゃないかって……」

衝撃だ。山本だけではなく、獄寺までも三浦ハルに行為を抱いていたなんて……。

ドクン。

心臓が浮いた。目があってしまったのだ。階段を上がってきた獄寺隼人と。

九月三日、四日 沢田家執事 獄寺隼人

沢田家にお仕えするようになって10年。笹川家とは、俺が14歳の頃からの付き合いだった。

その日は雲がやたらと黒かった事を今でも覚えてる。笹川はお嬢様特有の笑みを浮かべ、ドレスの裾を持ち上げて挨拶をした。そしてその後ろには、揃いのドレスを着て、盛大にずっこけたアホ女 三浦ハルが居た。

『はっ初めまして、京子ちゃんのめいどの三浦ハルと申します！』
アホみたいに笑いながら、チビのくせに一丁前に使用人を名乗るアイツが大嫌いだった。

しかし、アホだの馬鹿だの言い合ったり笑ったり…使用人としてではなく、俺を一人の人間として扱ってくれたのはアイツだけだった。何時しか、俺はそんなハルの事が好きになっていた。いや、もしかすると最初からだったのかも知れねえな。

くだんねー理由なのは分かった。でも、きつかけなんてそれだけで充分だったんだ。

さつき、階段の踊り場で山本とばったり会った。アイツは柄にもなく真剣な顔で、俺にこう言った。

『獄寺、今朝な…ツナとハルちゃんが』

ためえ何が言いてーんだよ、山本。ハルが十代目に想いを寄せてることなんて、んな事とつくの昔から知ってたんだよ。

抱き合ってた、だ？

十代目も何か理由があつてそうしたんだろ？知ったような口利くんじゃねえ。

『シヨックっつーか、なんつーかな』

今度はシヨック、だ？センチメンタル気取りかよ。

俺がこの八年間、どんだけ耐えてきたと思ってんだ？好きでも伝わらず、自分を見てももらえない辛さがめえに分かるか！！

朝食が終わっても気分は優れなかった。ああ、無性に腹が立つ。十代目には悪いが、俺は早々と自分の部屋へ向かった。

「アイツもハルちゃんのこと」

階段を登っていると、また山本の声が聞こえてきた。あの野郎、また余計な事を…！

急いで階段を駆け上がると、そこには雲雀が居た。雲雀はじつとこちらを見て視線を外さない。目には殺気が宿っているようにすら見えた。

「ワオ」

雲雀はそれだけ発すると、ドアを開き自分の部屋に戻って行った。

本人は平静を装っていたが、殺気を帯びたあの目…まさか、とは思ったが、隣の馬鹿が推測をペラペラ話し出しやがった。

「雲雀のやつ…もしかしてハルちゃんの事」

「獄寺くんっ！武っ！大変なんだ！！！」

その時、ドタバタと階段を駆け上がる足音が近づき、背後から十代目の声が聞こえた。

「どうしたんっすか！十代目！？」

「ハルが…ハルの様子がおかしいんだ！！」

俺と十代目、そして山本は急いで一階の使用人室に足を運んだ。

そこには、骸、クローム髑髏、ソファーに横たわったアホ女がいた。アホ女は顔だけこちらに向けたかと思うと、へにゃっと笑った。

「ハル、ちよっと過労で疲れちゃったみたいだす」

アホ女はヘラヘラと笑っている。俺は全身の力が抜けて、その場にしゃがみこんだ。

このまま

このまま、アイツをこの手で抱き締めることが出来たなら。

「ここ数日色々ありましたからね…。ハルさん、今日はゆっくり休んでください。後のことは僕とクロームで何とかしますから」

「ご迷惑をかけて申し訳ないです…」

「では僕とクロームは昼食の準備に取り掛かります」

そう言い残し、骸とクロームは部屋を後にした。

「本当心配したんだよ！ハル！」

そう言いながら、十代目はハルの顔を覗き込む。ハルは幸せそうに顔を赤らめた。胸が張り裂けそうになる。

「もう大丈夫です！熱もなかったですし」

「ハ…ハルちゃん、よかった。ほんと心配したのな」

山本は馴れ馴れしくハルにかけより、ハルの頭を撫でた。

「は…ひ、山本さん？」

「やっぱ、ハルちゃんは元気なのが一番いいのな」

山本は照れながら頭を掻く。ハルはまた顔を真っ赤に染めた。

その時、自分の中で何かが弾けた。今まで…七年間自分の中で積み上げてきたものがこみ上げてくる。頭が熱を持つ。

ふざけるな。

俺は七年間、十代目の影に隠れ、ハルへの思いを抑えてきたんだ。

どんな時も、ハルに触れたいという衝動を抑えつけてきたんだ。今

だって…

この腕でアイツを抱き締められたらどんなに…っ、どんなに…。

それを、アイツは、昨日ー昨日からしかハルのことを知らないアイ

ツは、俺が七年間我慢し続けてきたことをいとも簡単にしてのけた。ふざけるな。

「ハルは大丈夫なの？」

入ってきたのは、笹川のお嬢様だった。自分の使用人が倒れたつてのに、顔色一つ変えてねえ。

「大丈夫です！京子ちゃん」

「只の疲労だつてさ」

「そう…よかった」

口元は笑っているが、目は笑っていなかった。本当に安心しているのか？

「そうだ、獄寺さん、話があるの」

驚いた。笹川のお嬢様が俺の名前を呼ぶなんて殆どなかったからだ。

「俺に…すか？ 十代目じゃなく？」

「ええ。今いいかしら？」

「いいっすよ」

不信に思ったが、これ以上この場所にいと精神が崩壊してしまいそうだったので、笹川に促されるまま部屋を変えた。

「俺に話つて？」

言いながら部屋の扉を閉める。

「獄寺さん、私ねずっと昔から気付いてたことがあるの。気付いてたというより、知ってるの」

いきなり何を言い出すんだ、お嬢様は。というか、目の前の笹川は俺が知っている笹川とはまるで別人の雰囲気だ。

「あなたはハルのことが好き」

心臓が飛び跳ねるほどの衝撃が体に響いた。

「それも、命をかけれるくらい愛している」

笹川は耳元で囁いた。不覚にも俺はこの言葉に救われた気がした。今までずっと隠してきた恋心を認められた気がしたからだ。

「あなたとハルはお似合いだと思うし、私もハルの幸せを願ってる」
嘘だ。お前はハルの幸せなんざ微塵も願ってねえ。お前の魂胆は分

かっている、俺がハルを好きなようにお前は十代目のことが好きだからだ。

「ねえ、貴方に協力してあげる」

「協力？ アンタの策略に俺を利用する気だろ？ なんせアンタは十代目に気があるからな」

笹川は一瞬たじろぎ、あからさまに嫌な顔をしたが、直ぐにポーカーフェイスを取り戻した。

「そうね…。でも貴方の場合、邪魔なのはツツくんだけじゃないよね？」

身の毛が立った。コイツ…、全てを知っている。俺の心を全て見透かされている気がして、恐怖すら感じた。

「貴方にこれを渡しておくわ。地下の倉庫室の鍵よ」

笹川の言っている意味が分からない。怪訝そうな俺に笹川は不適な笑みを浮かべ、再び俺の耳元に顔を近付けた。

「ふふ。殺しなさい、山本武を…」

午前2時。仕事を終わらせ部屋に戻った俺は、ズボンのポケットに入れていた鍵を取り出した。

笹川の言葉が頭を過る

地下の倉庫室と聞いて、俺は七年前を思い出した。幼い笹川の提案で、笹川とハル、十代目と俺で、笹川邸を使ったかくれんぼをする事になったんだ。その日、屋敷内の間取りを知らない俺は鬼役を任された。

制限時間は一時間。ナメてかかったのが運の尽きだった。チビとは言え、笹川は誰よりも敷地内を理解していて、見事に鬼から逃げ切った。

笹川が当時隠れた場所…それが、地下の倉庫室だった。倉庫室と言っても、そこには何が置いていると言う訳でもない殺風景な場所だ

った。暗く、冷たい…言うなれば牢屋に近い。

そこで、山本を殺せ…？
なるほどな…

俺はその鍵をズボンのポケットに仕舞い、山本の部屋のドアを叩いた。

コンコンッ

「んー？なんだ、獄寺か。どうした？」

山本は目を擦りながらドアを開けた。馬鹿ヅラ晒しやがって。

「…こつちだ」

付いてくるように指示すると、山本は後ろから何だかんだと話しかけてくる。他の奴に見つかったらどーすんだ。これだから能無しは扱い難い。

「黙れ」

振り返り睨み付けると、奴は『わーたよ』と笑ってみせた。何だよその全てを悟ったような態度は。これから何が起こるのかも知らねーくせに。気持ち悪い。

地下へと続く暗い階段を降りながら、流石に危機感を感じたのか、山本が再び口を開いた。

何か言おうとした様だが、急に咳が酷くなり何も話せなくなる。そりゃそうだ。長年積もった埃でここの空気は最悪だからな。

ガチャ

南京錠を外し、流石に山本も状況を察した様だが、今さら抵抗した所でもう遅い。

キィ

俺は、息を荒くしている山本の頭を掴み、そのままドアにぶつけた。

バンッ

「…っ！獄、で…ら？」

不安から恐怖に変わる奴の顔が、俺の目にスローモーションで映った。

一方、奴は突き放されても尚、俺の腕を離そうとしない。しかし持病が悪化した事もあり、その握力は蚊が止まった程度だ。俺はその手をひっぱたき、再び南京錠をかけた。

ガチャ

そうさ、

てめえは

ここでじつとしてりゃあ良い。

もう二度とハルの前に現れんな。

「お前っ…ゴホゴホッ」

ま、その心配もねえだろうな。

てめえは

このまま

死又のダカラ

九月三日〜四日 笹川家長男 笹川了平

午後十一時十七分頃

俺は見えてしまった。

今でも事実を受け入れられず、広い屋敷内を意味もなく歩いていた。歩いたところで、事実は虚構にはならない。さっき見たものが実は夢でした、というオチにもならない。

京子が生まれたのは俺が五歳の頃だった。小さい頃から優しくて、可愛い妹だった。俺と京子はいつも一緒にいたし、俺は京子の純粋な笑顔が昔から大好きだ。ずっと守ってやりたいと思っている。

だから、京子のあんな表情を見てしまった時、俺は極限に言葉では表せないような衝撃を受けた。

京子は笑っていたのだ。…沢田と三浦の写真を蠟燭の火で燃やしなから…。その笑顔は俺の知っている京子の笑顔とは全く違うものだった。

恐怖、いや、違う。俺の中の自己形成のピースが粉々に崩れ落ちる…そう、これは一種の絶望感なのかもしれない。

「笹川」

低く、それでいてピアノ線が張られたような声に俺は顔を上げる。

「雲雀ではないか。こんな時間にどうしたのだ」

雲雀は漆黒の髪を靡かせ、階段を降りてきた。

「別に…君こそ」

「ここは俺の家だぞ！何もおかしいことなどないだろう」

「いや…」

雲雀は不気味な笑みを浮かべる。

「仮に…笹川社長が殺害ではなく拉致されているのだとしたら？」

な…何を言っているのだ、コイツは…。

「殺害ではなく拉致ならば、屋敷内を知っているものが圧倒的に有利」

ピンと糸が繋がった。

「なっ！！ お前、まさか俺が親父疾走の犯人だと言っているのか！？ 俺には親父を拉致殺害する理由などない！！」

前から極限にひねくれ者と分かっていたが、まさか俺を殺人犯扱いするなど、こいつは根性が極限に腐っている。

「動機なら…充分あるよ」

雲雀の口から出た台詞は予想外のものだった。

「なんだと…！？」

「まず、このパーティーという名の茶番において笹川家の財産を全て相続するのは長男の君ではなく、京子だ」

な…何を言っているのだ、コイツは。

「だから君はゲームが遂行される前に笹川社長を殺害した」

「ど…どういうことだ！？ お前の言っていることは意味が分からん！！」

雲雀は一瞬怪訝そうな顔をしたが、直ぐに辻褄があつたのか俺を蔑んだ目で見て、ほくそ笑んだ。

「もしかして、君、ゲームのことすら知らされてないの？ …論外だね」

「ゲームとは何のことだ！？」

「笹川社長が開いたこのパーティーは、京子の婚約ゲームなのさ。

一週間以内に京子の婚約者候補3人からプロポーズを受け、京子が合意したなら笹川家の財産は全て京子のものになるという、ね」
まさか…。このパーティーにはそんな意図が…。それで京子はあるに苦しんでいたのか。ごめんな、お兄ちゃん、気付いてやれなくて…。

「ふっ、哀れだね。笹川了平」

「京子ー！」

朝真っ先に京子の部屋へ向かった。京子…今、助けてやるからな！

「お兄ちゃん…っ！」

部屋をノックしようとする、廊下から京子の声がした。
なぜそこにいるのだ？

俺の頭に不安が過ったその時、京子が突然飛び込んできた。

「大変っ！今度は山本さんが居なくなっちゃったのっ…！」

顔を伏せ、ただただ肩を震わせている京子。瞬間、昨日の京子の笑みが、ぼんやりと脳裏に映し出され、俺は違和感と恐怖を覚えた。
何故だ？いつからお前は泣けなくなってしまったのだ？お前は人の痛みが分かる人間だ。こうなったのは、辛いことが重なりすぎたから…そうなのであろう？

「京子…すまなかった。もう大丈夫だ。こんな下らんゲーム、終わりに。」

！

今になって、俺は気付いてしまった。京子の髪から香る甘い匂いが、親父が研究に利用していた薬物のそれとよく似ていると言うことに。

「お前…」

俺の反応から察したのか、京子は顔を上げて上品に笑ってみせた。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。私、今とっても幸せだから」

誰だ？誰なのはお前は…

「京子！目を覚ませ！誰だ！？誰が薬などっ」

京子は人差し指を俺の口元まで持つてくると、また昨日の笑顔を作った。

「ハルが悪いんだよ」

「み…三浦？」

京子は肩を震わしている。

「そうだよ…ハルがツツくんに抱きついたりするから。だからツツくんは私にプロポーズしてくれないんだ…っ」

京子は弾劾を発するかのように勢いよく喋った。

「京子！落ち着くのだ！」

「だって雲雀さんは私にプロポーズしてくれたよ？ まああの人もハルしか見えてないみたいだけど…。みんなあの子の何がいいのよ…っ。雲雀さんだって私にプロポーズしておきながら本当はハルが好きなんだ。私なんて財産が手に入れば用済みなんだよ…」

ひっく。
京子は肩を震わせながら泣いていた。京子は他人のことではよく泣くが、自分のことでは滅多に泣かない娘だ。そんな優しい京子が、自分の恋心と愚かなゲームとのジレンマに苦悩したあげく、三浦に薬物を盛り、嗚咽するなど…。

「京子、大丈夫だ」

京子を苦しめているのはこの馬鹿げたゲームだ。そして最も許せないのは…京子の苦悩に漬け込み、笹川家の遺産を奪おうとしているあの男　雲雀恭弥。

許さん…極限に許さんぞ。親父を拉致したのは俺だと？　動機があるだとか？　一番動機があるのは貴様ではないか！！

貴様はこの俺が、絶対に許さんからな　！

「了平様！　お嬢様！」

向こうから、執事の骸が走ってくる。

「どうした!？」

「実は昨日から、地下の倉庫室のマスターキーが見当たらないので
す」

一瞬、雲雀の言葉が脳裏に浮かんだ。

『笹川社長が殺害ではなく拉致監禁されているのだとしたら』

まさか…!

「骸! 確かお前合い鍵を持っていたな!？」

「はい! 各部屋の鍵はマスターキーと僕の持つ合い鍵の2つです
から」

「よし! 地下倉庫室を開けるぞ…! 嫌な予感がする」

「はい!!」

「京子」

振り返ると、京子の肩の震えはとまっていた。俺は京子の華奢な肩
を掴む。

「京子はここで待っている。地下へは俺と骸で行く。お兄ちゃんは何
があっても京子の味方だからな! …早まるなよ」

京子は涙を拭きながら、コクリと小さく頷いた。その仕草を確認し
た俺は骸と共に地下倉庫室へと駆け出した。

九月四日 沢田家執事 獄寺隼人

よし

これで完璧だ。

山本は数日もすりゃあ地下倉庫室で死ぬだろう。

あとは雲雀さえいなくなれば…アイツは山本と違って、頭がキレる野郎だからな。このままハルの周りをうろつかれると一番厄介だ。なんとか奴を連れ出す手だてはないだろうか…

今が早朝だからか、屋敷内、少なくとも俺がここまで通ってきた場所には誰もいなかった。

大広間に近づいていると言うのに、使用人の姿も見えねえってのはどうゆう事だ？

「…は、ひい…」

それは力ない小さな小さな声だった。

「…ハル、なのか？」

声が出したのは、大広間の向かいにある使用人用の個室だ。声のする方へ駆け寄りドアを開けると、入り口付近の壁にハルがもたれ掛かっていた。

「…ご、くでりや…しゃん…」

俺に気付いたハルは、ふにゃーとした表情でこちらを見詰めた。見詰めると言っても目は虚ろで、滑舌も回っていない。

「…」

俺は初めてハルの頭をそつと撫でた。今まで殴った事はあったが、ハルの髪がこんなに柔らかいという事は今日初めて知った。そして、口元を緩めたハルの唇と、自然と己の唇が触れている事に気が付くのに、そう時間はかからなかった。

「は、はひっ…!？」

バンッ

身体が、強い力で突き放されるのを感じた。

「…最っ、低…ですっ!」

何か、ピアノ線の様なモノが、切れる音がした。

その軽蔑を表した目付き、潤んだ瞳、言動から、この千年の恋の結末を知らされた。俺は明らかに拒絶されたんだ。

なんで、だよ？

「…ハ、」

「キスなんて…ツナさんとしたことないのに…!!」

ハルが口に出したのは
十代目の名前だった。

再び、あの音が聞こえた

…畜生

「は？ツナさんだ？」

ふざけるな

「！」

「十代目はなあ…！笹川の事しか見えてねえんだよ！」

馬鹿じゃねーの！

「獄、寺さ…」

「なんで、だよ……」

こんなに愛してんのに…

「どうしちゃったんですか…？獄寺さ」

ドン！

「なんで、十代目じゃねえと駄目なんだよ！」

「きゃっ！」

床に押し倒されても尚、ハルは一向にこちらを見ようとはしなかった。

…なんでだよ

「ハル」

こつち見ろよ

「は、ひ…っ」

こつちを…

「俺を選べよ」

声が震え

目の前も

霞んで

ハルの表情すら

見えなくなる。

なあ、

どうすれば

俺を見てくれる？

自分が今どれだけ惨めかなんて承知の上だ。

ただ

頭で分かっているも

止められなかった。

この思いも

衝動も暴言も

この大粒の涙も

なのに

「や、嫌…です」

その一言は、

俺が出来なかったことを

あっさり成し遂げやがったんだ。

九月四日 笹川京子婚約者候補 沢田綱吉

それが夢なら いや、せめて何かの勘違いならであってほしいと思っただんだ…。

今、この光景を見るまで。

朝、少し早起きして屋敷を散歩していると、了平君の部屋が騒がしくて覗いてみたんだ。

そこには、骸、了平君、そして青ざめた顔の山本がベッドに横たわっていた。山本の様子は明らかにおかしく、持病が発しているのか喉からぜえぜえという音が漏れている。

「どうしたの!？」

「沢田! 大変だ。山本は獄寺に地下倉庫に閉じ込められ、持病が悪化したのだ」

「外部との接触が遮断されている今、山本様の持参された発作止めの薬しかなく…山本様は極めて困難な状態です。それに頭の殴られた後から血が出ていますし…」

え…? 獄寺君が山本を閉じ込めたなんて何かの勘違いだよ。理由なんかないじゃないか!

「まずいぞ。もしかしたら親父拉致も獄寺の犯行かもしれん!」

「ええっ! 拉致って? 考えすぎだよ!」

「とにかく今から獄寺は“危険人物”だ! 獄寺を探すぞ! 沢田!」

了平君と一緒に俺は屋敷中の部屋を巡った。そして、やっと見覚えのある銀髪の青年を見つけたんだ。だけどその青年は俺の知ってる獄寺君じゃなくて。

「獄寺君! 何してるの!？」

考えを巡らす前に僕は叫んでいた。

「ツナさん…助けて！」

獄寺君が覆い被さっている下には見覚えのある脚がバタバタしている。そしてその亜麻色の髪　間違いないそれはハルだった。

「ハルから離れる！！」

危険。

ただその感覚だけが、俺の体中を巡る。

獄寺君は無言で足を地に着け、ハルから少し離れた。

安堵感。一瞬緊張の糸が切れほつとした。それと同時に背後から平君が叫んだ。

「獄寺！貴様…山本を監禁するなど極限に危険だ！　もしや貴様が親父を…」

了平君！！　そのタイミングでそれを言うのは逆に獄寺君を刺激しちゃうよー！！

「ご…獄寺さん。どうして山本さんを…山本さん病気なんですよ！？」

ハルは興奮したように獄寺君に問い詰める。

「ああ。病気のことなんざ知ってるよ。なんせ、監禁しまえば病気が発病して死にじまうからな」

パンっ

大きな音が部屋中に響く。ハルが獄寺君の頬を殴ったんだ。

「最低ですっ」

ハルは大きな目に涙を浮かべている。

「…う…て…っ」

獄寺君は小声で囁いた。

「どうして…っ。こんなに愛しても、愛しても…俺を選んでくれな

いんだ…。いつもいつも…」

泣いている。獄寺君は泣いているんだ。

「フツ…ハハハハハ！」

獄寺君の笑い声に一瞬たじろいた。

「これも全部十代目がいるから悪いんだ…ひひっ。殺してやるよ！ハル！お前の目の前で十代目をなああ！！」

「いやあああああ！」

ハルの叫び声が室内に響いた。ハルは了平君に駆け寄り、ただひたすら震えている。

「…」

意味が分からなかった。今の状況も、これが現実なのかどうかも。

獄寺君がハルの事を好きなのは知っていた。

でも、俺が居るからって…どういう事…？

「十代目」

獄寺君は顔色一つ変えず、常備している銃を取りだし、俺に突きつけた。

了平君の叫び声が聞こえるけれど、全く聞き取れなかった。頭の中は恐怖感に染まり、俺は『死にたくない』と心の中でひたすら叫んだ。

目の前にいるのが、自分の執事だなんて信じられない。俺は、今までこんな無機質な表情を見たことはなかった。

君は、誰なんだ…？

その時だった

「大丈夫っす」

目の前の彼がいつもみたいに笑ったんだ。

「すぐ、楽にして差し上げますから」

まるで、獄寺君の様に。

「分かったよ」

なんの確信も無いのに俺はそう呟き、目を閉じた。
ホント馬鹿だなあ…俺。

「やめて、くださいっ！二人とも…っ！！！」

バタッ！

同時に何かが倒れる音がした。

ハルは人形みたく、床に倒れていた。

「ハル！！」

俺と獄寺君は同時に叫び、ハルに駆け寄った。

「は…ひっ…ひ…」

ハルは全身が痙攣していた。目も虚ろで、口を大きくあけ、魚みたいにパクパクしている。

どういふことなんだよ！ハルはどうしちゃったんだよ！

「まさか！！」

了平君は何かを思い出しかのように、ハルを抱き起こした。

「ま…まずいぞ…このままでは三浦が本当に死んでしまう…」

「んだよ…これっ！」

「沢田！ 骸とクロームを呼んでくるのだ！ 俺の部屋で山本の看病をしているはずだ！」

「う…うん！分かったよ！」

一体どうなってるんだ？ハルは…ハルは…大丈夫だよね…

俺は無我夢中で全力疾走した。

九月四日～五日 笹川京子婚約者候補 山本武

「ゴホゴホッ！ゴホ！」

やべーな…俺死ぬのかもな。

獄寺に連れてこられた部屋は、窓がなく真っ暗で動く度に埃が舞った。

骸と了平が助けに来てくれて、今は屋敷のどこかのベッドに寝かせてもらってっけど…

あそこの空気が悪かったのか、目の前は霞んで咳も一向に治まりそうにない。おまけにドアにぶつけた後頭部の痛みが酷くて、全身が麻痺しちまつてるみたいだ。

ただ、耳だけは機能してるみてーで、隣から雲雀と骸、京子さんとクロームの声が聞こえてくる。

「ねえ、そろそろ決着つけようよ」

「何の話よ？」

「笹川社長拉致、いや殺害の犯人の特定だよ」

「ちよつと待って！お父様が誰かに殺された確証なんて何も…！」

「無い訳じゃないよ」

雲雀はいつも以上に不機嫌な口調でそう言つと、クロームを睨み付けた。

「…」

「クローム、恐れることはありません。君の見たことありのままを話せば良いんです」

「…はい。骸様…」

クロームの声が震えている。まるで何かに怯えてるみてーだ。

「三日前の夜、丁度7時半です。私はご主人様がお休みの東棟の見回りをしていました。…そこで…うう…」

いつも感情を表に出さないクロームが、泣いてる…のか…？

「クローム…」

隣の骸はクロームの背中を摩り、続けるように促した。クロームは頷き、一言一言を噛み締めるように言った。

「ご主人様の部屋から何かが焼けるような臭いがしたので、ドアを…開けたら、私、…見てしまったんです。…ご主人様の、全身が燃えている姿を…」

「良くできました、クローム…ここからは僕が話しましょう」

京子さんも言葉になら無い声を震わせていた。親父さんの死に際なんて知りたくねえよな…

一方雲雀はただ黙って使用人の二人を睨み付けている。

「ご主人様に呼ばれていた僕は、8時に書斎の扉を叩きました。そこでクロームはカタカタと震えていて、最早そこに“ある”のはご主人様かどうか分からないモノでした」

「う、嘘よ…！お父様が…そんな！」

「この島にいる人数は、私達使用人が管理しております。あれはご主人様で間違いないかと…」

ドラマでしか聞いたことの無い物騒な単語が次々と並べられていく。なんなんだ？これ…。

ドバンツ！

「骸！クローム！」

その時だった。ツナの叫び声が聞こえたのは。

「おや？いかがしましたか？ボンゴレ？」

「ハルが、ハルがヤバイんだよ！早くしないと…死んじゃう！！」

寝れねえ…。

時計を見ると時刻は0時を回っていた。

持病の方は薬の方で幾分かマシになったが、頭の殴られた後が疼いた。いや、それだけじゃない…。笹川の叔父さんの死体が発見され、ハルちゃんは今中が麻痺したり嘔吐を繰り返したりで、命すらやべえ状態だ。何やら原因は不明らしい。今は胃腸薬と睡眠薬を飲まして眠っているらしいが可哀想に…。

獄寺はあの後、危険人物として西棟の一室に閉じ込められたらしい。ハルちゃんがあんな状態だったのに、自分は蚊帳の外だなんてさぞ苦痛だろうな…。

「ちっ」

舌打ちをしてベッドから起き上がった。

部屋を出て、廊下を歩いていると曲がり角に京子さんの茶色い髪が見えた。挨拶しようと思を出そうとした時…

「君なんだろう？ 三浦ハルをあんなにしたのは」

男の声が聞こえた。京子さんの前には睨みつけるように恭弥が立ちはだかっていた。

「僕には分かるよ。たしか笹川社長は薬物を集める変な趣味があったね。君は笹川社長の部屋から薬物を持ち去り、三浦ハルに薬を盛ったんだろう？」

なっ！？なんだって？

「ちなみに山本武監禁事件も君が一役買ってるんだろう?」

いきなり自分の名前を呼ばれてドキツとした。何言ってるんだ、恭弥のやつ…。

「そうだとしたら…何なの?」

「僕と結婚してほしいんだ」

何なんだ。何を言い出すんだ、アイツは…。ハルちゃんが好きじゃなかったのか…? いや、そういう問題じゃない…か。

「フフ…」

京子さんは大袈裟に笑い出した。京子さんってあんな感じに笑う人だったか?

「この私を脅す気? プロポーズを受けなかったら、ツツくんにはバツすってことでしょ?」

雲雀は不気味な笑みを浮かべる。

「ふざけるんじゃないわよ!! この下男!! アンタがこの私を脅すですって? この笹川京子を脅すなんて恥を知らない!!」

京子さんは怒り狂ったかのように怒鳴った。あれは本当に京子さんなのか?

「そうだ…雲雀」

雲雀の背後から了平さんが現れた。了平さんもこの会話を聞いてたのか。

「笹川了平!」

「お兄ちゃん!!」

二人も了平さんの登場に驚いている。

「お前のような奴があれこれと動くから、京子が京子でなくなってしまったのだ」

その声は震えていた。

「ふざけたゲームとお前が京子の笑顔を奪ったのだ!!」

「何言ってるの…?」

「お前が恥を知れ! 雲雀iiiiiiii!」

了平さんは叫ぶと同時に雲雀にタツクルした。

「笹川…お前…」

ポタ。

雲雀の手をつたって赤い液体が落ちる。

あれは…血!?

了平さんが雲雀から離れると、雲雀は床に倒れうずくまった。両手を右腹に当てている。そしてそこから血がとめどなく溢れていた。視線を了平さんに移すと、了平さんは息を切らし手には血まみれのナイフを持っていた。

「お兄ちゃん…っ!?!」

俺は…どうしたらいいんだ!?

「了平、さん…!?!」

「山本さん助けて!…お兄ちゃんがっ…雲雀さんを…!?!」

俺に気付いた京子さんは、全身を震わせて叫んだ。

足がすくんだ。でも、俺がやらねーと…他の皆も危ない…!

「何やってんすか…?」

俺は相手を刺激しないように、且つ素早く了平さんのもとへ駆け寄り、血塗れの手を叩いた。

カラン

その手に握られたナイフは、意図も簡単に床に落ちたんだ。

「すまん。…一人にさせてくれ」

了平さんは放心状態のまま、その場を立ち去った。

「お兄、ちゃん…」

京子さんは壁にもたれ掛かる様にして泣き崩れた。

その時だ。雲雀は立ち上がり、ふらふらと歩き出したんだ。

いや…歩くと言うより這うって表現の方が的確かもしれない。

「雲雀…!」

なにやってんだ、…よ？

右腹を押さえ息を荒くしながら、雲雀は何処かに向かおうとしている。

「肩、貸すから！」

フッ

雲雀は息を吐き出すようにして笑った。

「無茶すんなよ…！雲雀！」

ベッドのある部屋はもうすぐだ。

「生きるよ…！」

九月五日 笹川家長女 笹川京子

どうしよう…。

お兄ちゃんが…変わってしまった。もうあの優しいお兄ちゃんはいないの？

床には雲雀さんの血が飛び散っていた。その量の多さにぞっとする。お兄ちゃんはお兄ちゃんのために雲雀さんをさしたのかな。でもね、お兄ちゃん…本当に悪いのは雲雀さんじゃなくてハルなんだよ…。

「京子ちゃん！！」

ツツくんが向こうから走ってくる。雲雀さんがハルに薬を盛ったことバラしたのかな…？ ナイフを持ったお兄ちゃんと遭遇したのかな？それともハルが何か入れ込んだの？

ツツくんは息を切らし、私の目の前まで来ると、何かを固く決意した瞳で私を見据えた。そう、ツツくんは固い意志をもって一つのことと集中すると、周りが見えなくなるよね。だから床の血にも気づいていない。

「京子ちゃんのお父さんが亡くなった後に言うのはどうか迷ってたけど…、色々あって…俺決めたんだ。こんな時だからこそ伝えようって！」

「え…？」

ツツくんは私の手をぎゅっと握った。

「俺はずっとずっと…京子ちゃんが大好きでした」

「ツツくんまで遺産が欲しいの！？ ツツくんはハルが好きなんですよ…？ 抱き合ってるの見たよ…！」

思い切り叫んだ。その様子にツツくんは驚いたようだった。

「遺産って何のこと…？ それと誤解を解くために言うと、あの日俺はハルに告られたんだ…。でも俺は京子ちゃんが好きだったから…。京子ちゃん、色々あった今辛いのは分かるよ。だけど俺でなければその…君の支えになるから！」

ツツくんは顔を紅くして俯いた。

ツツくん…心からあったかいものがこみ上げてくる。これが幸福なんだね…ツツくんは私のことを思ってくれてたんだ…。ハルじゃなく、私を…。

え…、ハル？

満たされていく幸福感が海の潮の満ち引きのようにざーっと体から抜けていく。それと同時に脚が震えだし、下から新しい感覚が上っていく。これは…知ってる。恐怖感…。

私はハルの食事に何回か得体の知れない薬を盛った。
もしかして私…取り返しのつかないことを。

「うわああああ！！！」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

私、ハルに何て事を…。もしかして今頃死んでるかもしれない。
恐怖が体中を蝕む。震えが止まらない。寒い…。

「京子ちゃん！どうしたの？」

ツツくんの温かい手が私の肩を掴む。

ツツくんになら…今、ツツくんになら言えるかもしれない。

「ツツくん。もう遅いの…。私、ハルに…何て事…」

ハルに会わなくちゃ。ハルに謝らなきゃ。

気付くと私の脚はハルのいる使用人室に向かって走り出していた。

九月五日 笹川家執事 六道 骸

…
なんて低俗な遊戯なのだろう

主を亡くした駒達は、己の感情が赴くままに動き出す。この五日間、あるものは財産に、あるものは自尊心に、あるものは愛に狂い、憎しみあい、傷付けあった。

それが今はどうだろう？

休息を取っている場合ではない。ゲームはまだこれからなのだから。しかし所詮、駒は駒。彼らは与えられたフィールド以外は動けない。それでは全く面白くない。ならば、僕が自由にして差し上げよう。

スペアキーを片手に向かう先は、西棟の三階にある一室。

「クフフ…」

まずは、この男を解き放つでしょう。第一手にしては、強力すぎたかもしれないが…まあ良いだろう。

固く閉ざされた扉に、ゆっくりと鍵を差し込めば準備は完了。

さあ、僕を存分に楽しませてください。

獄寺隼人

鍵を解き、扉を開くと…それ…はまるで狂犬のように飛び出し、僕に一瞥だけくれると、東棟に向けて走り出した。
「待ってください!!」

僕は獄寺の後を追い掛ける。彼の速さを尋常ではなかった。まるで呪文を唱えるように「ハル…ハル」と呟いている。おそらくハルのもとに走っているのだろう。彼を解き放つべきではなかったか？
「いや、このままでは“奴”の思惑通りにいくだろう。獄寺を閉じ込めた方がいいと言いつ出したのも“奴”だ。だから僕は“奴”に抵抗すべく獄寺を放ったのだ。」

「きゃああああ！！！」

高い女の声が響いた。どうやらハルの声のようだ。獄寺のスピードが上がる。

獄寺とそれを追う僕の前方には、ハルと了平様が向かい合っていた。了平様の手に握られているのは……包丁！？

「すまん…ハル。お前が生きたままだと、京子の罪が明るみになつてしまうのだ。お前は小さい時から笹川家や京子に尽くしてくれた。だから頼む…京子のために死んでくれええええ！！！」

「了平様お待ちください！」

叫んだが、今の了平様には聞こえていないようだ。駄目だ…間に合わない！！

「い…嫌です…！！！」

「やめろおおおお！！！」

獄寺はハルの前に立ちふさがった。

「うつ！！！」

「いやああああ！！！！獄寺さん！！！！」

包丁が獄寺の腹部に刺さった。血が滴り落ちている。

「ぐそお…」

「なぜ邪魔をするのだ！貴様あ」

獄寺は自分の腹部にある包丁を抜いた。

「ざ…ざけんな！！！」

そしてそのままそれを、了平様の脇腹に刺したのだ。

「てめえなんかに…ハルを…ハルを殺らせて、たまつか…よ」

「獄寺様…」
「よくも…」

了平様に刺されても尚、獄寺は笑っていた。腹部からの大量出血で、それどころではないだろうに…
やはり彼は異常だ。

獄寺の手が包丁の柄から離れたのを確認し、僕は了平様に駆け寄った。

幸い了平様の傷は浅いようだ…僕は傷口に手持ちの布巾を当てる事にした。

一方、ハルは獄寺の傍らで彼の名を叫び続けている。

「獄寺さん！いやです！獄寺さん！獄寺さん…！」

「ハル…良かった…」

「喋らないでください！」

「…愛してっ、から…」

ハルの目からは涙が止めどなく流れていた。獄寺は左手を自分の腹部に、右手をハルの頬に当て、またあの呪文を唱え始めた。

「ハル…ハ、ル…ハ…」

「獄寺さああああああん…！」

獄寺は最期までたった一人の女性を愛し名前を呼び続けた。それは…とても歪んだ愛情だったけれど。

廊下の向こうから、二三の足音が聞こえてくる。その中には間違いなく“奴”がいる…

「…お待ちしておりましたよ」

「きゃあああああ！！ お兄ちゃん！お兄ちゃああん」

京子様は負傷した了平様を見るなり叫び出した。そして了平様に駆け寄りその場にしゃがみ込んだ。

「うう…お兄ちゃんお兄ちゃん死なないで…」

「大丈夫ですよ、京子様…了平様は軽傷です」

「獄寺君！！　なんで獄寺君がここに…何で血まみれで倒れてるんだ！！教えてくれ、骸！！　この屋敷は一体どうなっているんだ！！？」

「そうですね…。もう、よろしいでしょうか」

そう…このゲームはあらゆる駒達による愛憎から引き起こされた。そしてその中心にあるのは笹川社長の死。

「そろそろ終わりにしましょう、ボンゴレ十代目…いや、笹川社長を殺した殺人犯さん」

「え！？　ツツくんがお父さんを…」

「何言ってるのさ、骸。俺がどうして…叔父さんを殺すのさ？」

沢田は僕を真っ直ぐに見つめた。もうあなたの瞳には以前のような無垢さは存在しないようですね。

「僕は見たのですよ。1日目の夜にあなたが社長の書斎に入っているのを。あなたはそこで、社長を殺害し、カモフラージュのためにボイラー室に捨てた」

沢田は視線を泳がす。

「何のことか分からないな…」

「もう、いいでしょう。僕は凶器も見つけ、回収しています。警察が来るのも時間の問題。凶器からはあなたの指紋が検出される」

沢田は俯き、口元に笑みを作った。

「フ…ハハ。やっぱり悪いことは出来ないんだなあ…。獄寺君に殺されかけた時、罰が当たったのかと一瞬死を受け入れた。けど俺は死ねない、そう悟ったんだ…。俺は京子ちゃんを愛しているから…っ。俺は生きて京子ちゃんを手に入れるんだ！！」

ふと我に返った沢田は僕から視線を外し、遠くを見つめて子供に絵本を読んで聞かせる様に話し出した。

「俺は…あの夜、叔父さんに会いに行った。…京子ちゃんと籍を入れた…って…伝えんだ」

京子様は両手を口に当て、その場に立ち尽くしている。彼の言葉を否定するように、何も聞こえないように、小刻みに首を横に振っていた。

「そしたら、叔父さんが『お前などに京子を守る資格はない』って…そこで、俺達は京子ちゃんの婿候補だって話も知った。叔父さんは俺に京子ちゃんを渡す気なんて全然無かったんだ!!! 武も恭弥君も、京子ちゃんの事を見ていない…俺が一番、京子ちゃんを愛してるのに…!!!」

「そこで、犯行に及んだと?」
一気に言葉を吐き出した彼は、その後まるで魂が抜けた様に静かに頷いた。

愛のために人を殺める?

クハ

沢田綱吉、まさか君がこれ程、愚かな人間だとは思いませんでしたよ。

「いや…ツツ君もつやめて!…私はここにいるから!目を覚まして!」

京子様は沢田に駆け寄り、彼の肩を揺さぶった。

二人の目には涙が光っていた。それが相手の為のものなのか自分の愚かさを恥じるものなのか…僕にはまるで見当がつかない。

「ツツ君…愛してるよ…」

その言葉で沢田は初めて、自分の犯した大罪に気づく。

「…!!ごめん…お…れ、俺ええええ…!!!」

そして、まるで子供のように声を上げ泣き続けたのだった。

どうやらこのゲーム、僕の勝ちのようだ。
沢田綱吉、これでチェックメイトです。

エピソード 笹川家メイド クローム髑髏（九月十日）

お館様のゲームは終わりました。それぞれの胸に傷跡を残して。人は時に迷い、自分のエゴで他人を傷つける。だけど他人を蹴落としてまで得られる幸せなど、一瞬で砂の城のように儚い。そしてその幸せはすぐに消える。

腹部を刺された了平様、獄寺様、雲雀様はあの後外部との接触が戻り、病院に運ばれ命を取り留めました。

しかし了平様は今でも惨劇の幻想に捕らわれています。時に奇声をあげ、怯えるのです。まるで自分の犯した罪を思い出したかのように…。

それに比べて、獄寺様は3人の中でも一番重傷だというのに、その顔は幸福に満たされています。とても穏やかな笑顔で「ハル…ハル…愛している」と四六時中呟くのです。

そして、山本様。その後は精神的ショックが大きかったようですが、それを乗り越え、持病の手術を受けられたそうです。おそらく山本様なら乗り越えられるでしょう。

ハルは、昔のように笑わなくなりました。今のハルの笑顔は張りばてのようです。獄寺さんのお見舞いに毎日通い、2人はいいい感じだそうです。最早ハルに人間らしい感情が存在しているのかは私には分かりません。

ツナ様は、あの後自首して警察に捕まりました。

骸様は、この惨劇を忘れないようにと書物に5日間のことを、何かに取り憑かれたように書き留めています。

ねえ…骸様。このゲームに勝者など存在しないのではないのでしょうか。主を失った貴方は自分の道すらも失ってしまった。貴方もまた、このゲームに苛まれた犠牲者なのです。

そして私は、京子様のお世話係を承ることになりました。

京子様は、父を殺害されてもなおツナ様の帰りを待っています。

「ねえ…クローム。空がね…青いの」

「はい」

「こんなにも空が青いことを私は忘れていたみたい…。なんだか空が青いだけで涙が溢れてくるの…」

そこに在る京子様の涙は、空よりも青い。

エピソード 笹川家メイド クローム調羹（九月十日）（後書き）

完結しました。

ここまでお付き合いいただき心から感謝しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6001o/>

青い涙と狂人達の愛

2011年1月26日22時06分発行